

シマ・島に通いつめた比嘉さんが見たものは、シマの古層である。古層とは何か。私もいつしか御嶽を一人で回りつづけるなかで、そのことを考えるようになっていた。考えるというよりも、御嶽の空間にたちそこの嵐に吹かれていると自らの内面に吸引されるような不思議な感覚にとらわれることがある。

古代から連続として継承されてきた祭祀の場に立ち会うと、内面への吸引力はもっと強くなる。神人たちは祈り、うたう。神々の誕生、ムラの創世、ムラの事件やさまざまな物語。このように祭祀に立ち会うとは、古い記憶の層を掘りあてることであり、記憶の底におりることなのである。

「琉球弧には奇跡的に古代の祭祀がまだ生きている。それがどれほどの宝であるか、自覚しなければならぬ」というのが比嘉さんの口癖であった。

たしかに、歴史学や、民俗学、考古学といったものだけでは、すぐに固い岩盤につきあたってしまう時間の層。西洋では心理学者のユングが「無意識」の層を深く掘りあてることによって、遙か古代の意識をつぎ出した。私たちは現代の位相から深い井戸を覗き、その底から水を汲み出す。比嘉さんは、このようなユングの深層心理

ユングによれば、無意識にも個人的無意識と普遍的無意識があるという。もっというと、個人的無意識、人類的無意識、生物的無意識まで遡ることができる。祭祀にも家族のもの、国家(王朝)レベルのものがある。琉球弧の祭祀と言う場合、普通ここまでで、意識の層に合わせて考えてみると、御嶽の神々が祖霊神だという認識にたつとき、ということになる。なぜなら、祖霊信仰は人は親から生まれ、その親が神になるという、ということからだ。ただ、祖霊信仰は人類普遍のものであるが、祖霊は「地場」を離れる。そして、さらに生物的無意識となると、DNAまで遡ることになる。人のDNAは、過去から未来へとかけぬけていく。DNAこそ過去から未来へと生命が連続していく。そして、琉球の祭祀世界でも、生命のバトンを受け渡す儀礼がある。「祭りというのは、うらぶものなんです」と比嘉さんは言い、久高の祭りでは、あの世に帰った祖霊が、現世に「死が二つあるという、ハンザアナシーとイザイホーである。この「魂(マブイ)の再生物語」

の中核をなすものである。ハンザアナシーは4月と9月の2回行われ、ニラーハラーからそして比嘉さんの思想の中核をなす、もう一つの柱がこの本のタイトルにもなっている。母が神になるという考え方である。では、母たちが神になるということはどういうことか。比嘉さん自身はどのように考えていたのだろうか。

「親が亡くなったとき、子どもはどう思うのだろうか。今でこそ合理的に考えて、人は死んでいるけれど、昔の人たちは今以上に感性が豊かであったと想像することが、夢の中にあらわれてきたと想像して、

# 母たちの神 比嘉慶





